

鶏のユートピア

—媒体論として—

島田裕巳

ユートピアがその本質上、現実を超越した世界であるとするなら、ユートピアならざる現実社会に生活する者は、いかにしてユートピアを構想しうるのだろうか。また、彼らは来たるべきユートピアをひとつのイメージにかたどって夢想しうるのだろうか。現実からの超越はユートピアンにとって永遠の課題である。ユートピアについて語るには、社会の中で使用され、社会的現実を支えていることばの体系は足かせである。この世ならざる世界を、この世のことばで語らざるを得ないという根本的矛盾に、ユートピアは常に直面している。

この世のことばで語られたユートピアは、語り始められたその刹那から、すでにユートピアから遠ざかる。ユートピア世界のありようを詳細にえがき出そうとすればする程、語り出されたユートピアは制度化の極度に進んだ反-ユートピアへと転化していく。ユートピアを語ることの根本的な矛盾につきあたった時、そこでは、ユートピアについて一切沈黙することがひとつの姿勢たりうる。ユートピアは、ユートピアを垣間見た人間の無意識の世界へと沈潜し、時に、夢となり、詩となって表出される。夢と詩とは、ユートピアのたどるひとつの運命である。

しかし、ユートピアの運命はそれにつけるわけではない。沈黙とは異なる別の道がないわけではない。ことばに代わって、ユートピアのイメージなり、ありようなりを表現し伝達しうる何らかの媒体を獲得することによってユートピアに接近することができる。媒体を得たユートピアのイメージは、ユートピア実現への期待を醸成させ、この世にユートピアを希求する運動を現出させる。個人の内面的な体験としてのユートピアが、共同性を獲得していくためには、媒体の存在は不可欠である。そして、何が媒体として選ばれるかが、ユートピアの運動とそれに関わる人々のその後に大きく影響することとなる。

彼らは、「鶏」をユートピアへの媒体として選択したのである。彼らとは、昭和20年代の後半に、山岸会⁽¹⁾という養鶏家の集団に集まってきた人間たちのことを指す。山岸会の会員たち(もちろん、そのすべてではないが)は、養鶏を単なる生活の手だてとはとらえず、養鶏が自らの日常を超越し、ユートピアへと結びついていくことを強く願った。やが

て、この「鶏」という媒体は彼らを予想外の方向へ導いていくことになるが、その経過を追う前に、ここではまず昭和20年代後半という時代に話をしほりたい。山岸会の運動の全体の歴史からすれば、初期の形成期にあたるこの時代、共同体・コミュニケーション建設の方向性は一切示されていなかった。「鶏」という媒体が、山岸会に関わる人間たちに及ぼした作用の諸相を整理しながら、ユートピア運動の展開過程を考察したい。

I 人間関係の媒体としての「鶏」

「鶏」の媒体としての第一の働きは、それが人間関係を取り結ぶ際の仲介役として作用したところにある。「鶏」は人と人が出会う場を用意し、山岸会という集団の形成されるきっかけを与えた。それは、「鶏」がその時代にあって、人を引きつけるだけの実利的ならびに象徴的な価値を有していたからである。具体的にはまず、山岸会誕生の直接のきっかけとなる。二人の人間の出会いを準備することとなった。

昭和25(1950)年9月、日本本土をジェーン台風が襲った。当時、京都府の農業改良普及員であった和田儀一は、京都市伏見区向島の巨^{おぐら}棕干拓地で台風被害の実地踏査をしていた。そこでは、出穂間ぎわの水稻が一面倒伏してしまっていたが、彼はその中で、一区画の田だけ稲が立ち揃っているのを発見したのであった。和田はその田に強い印象を受け、田の持ち主に関心をそそられた。その持ち主こそが、山岸会の中心的存在となる山岸巳代蔵(1901-1961)だったのである。和田は山岸の農法と、それに深く関連した養鶏法に興味を持ち、山岸を世に出すべく奮闘する。彼は山岸を農協などの集まりへひっぱり出し、農業や養鶏の話しをさせた。やがて、山岸の考えに共鳴する者も現われ、次第に山岸と山岸の考案した山岸式養鶏法の名は農業界に広まっていった。⁽²⁾

なぜ、和田は山岸という人物に、また、彼の山岸式養鶏法にひかれたのであろうか。その背景には、当時の社会状況が大きく関わっていた。昭和25年といえば、敗戦からまだ日も浅い時期であった。日本の社会は占領下にあって、混乱状態を完全には脱しえず、食糧の欠乏や貨幣価値の下落は深刻な社会問題と化していた。山岸巳代蔵が、戦時中、一旦中断していた養鶏を戦後になって再開したのも、自活のためにやむをえず始めた農業の経営に、養鶏の導入が必要なことを改めて認識したからだった。食糧増産は時代の急務であり、和田は、経済的で効率のよい農法の鍵を山岸の養鶏法の中に見出したのである。新たな時代に即応した農業経営の指針を求める社会的要請が、和田に山岸を「発見」させたのだとも言えよう。そういった、農家をとりまく社会的背景がなかったとしたら、二人の出会いはそれ以上発展することもなかったであろう。

この頃、養鶏の専門誌の紙上では、山岸式養鶏法の他にも、新しい養鶏法がいくつも紹介されている⁽³⁾。養鶏の過程で排出される鶏糞が田畑を肥沃にするため、以前から、養鶏を農業経営に取り入れるメリットは指摘されていたが、手間のかかりすぎが最大のネックになっていた。例えば、一日に5・6度給餌するのが常識とされていたからである。それに対して、一日一回給餌を説く山岸式養鶏法は、常識をくつがえす画期的な方法であった。当時、山岸式養鶏法が「ナマクラ養鶏」と呼ばれたゆえんも理解されよう。さらに、山岸式養鶏法が多くの農家の採用するところとなれば、卵の生産量は増加し、卵は農家ばかりでなく一般家庭の食卓をうるおすはずであった。昭和20年代は、卵が大量に出まわる以前の時代であり、貴重なタンパク源である卵は、体の弱い者の滋養の「薬」でさえあった。卵をあり余る程生産し、卵価を5円に引き下げようという山岸の主張は、当時の状況に照らしてみれば、充分に説得力を備えたものだったのである。⁽⁴⁾

あるいは、「鶏」の価値は以上のような、現実的な物質面での利益には還元できないところがあるとすべきかもしれない。暗い夜の世界が終わり、夜明けが訪れたことを知らせる鶏の鳴き声は、新たな時代の到来を告げるにふさわしい比喻であり象徴であった。山岸巳代蔵自身も、そういった鶏のシンボリズムを意識し、鶏鳴によって、「夜の世界だと云い度い程混濁し、間違い・怒り・紛争・苦悩が多過ぎる」日本の夜が明けるのだといった言い方をしている。⁽⁵⁾山岸会に集まってきた農民たちにとって、「鶏」は新たな時代を予感させる希望の星だったのである。

「豚」でも、「牛」でもなく、「鶏」こそがユートピアへの媒体として選択された必然性は、養鶏のもたらす実際的な利益と、「鶏」にまつわる象徴性の二つに関わっていたと考えられる。手間のかからない「ナマクラ養鶏」ならば、資金的な裏付けの乏しい一般の農家であっても、比較的容易に経営の中に導入できる。個々の農家はその現状を打破し、食糧増産という時代の声に答えていく上で、山岸式養鶏法は大いに魅力のある存在だった。山岸の主張する通りにことが運ぶなら、山岸式養鶏法は、稲の収量の増加や、鶏卵・鶏肉の売却を通じて、農民たちに物質的な利益をもたらし、ひいては、その精神生活を豊かなものとしていくはずだった。

「鶏」は、こうして農民たちに、物質生活の充実を基調としたユートピアのイメージを喚起する媒体として機能し、山岸会というユートピア運動が開始されるきっかけを与えたのだった。そして、そこには、「鶏」の持つ象徴性が何ほどこか作用していたのである。

II 思想を深化させる媒体としての「鶏」

山岸巳代蔵という一人の思想家を生んだのも「鶏」であった。「鶏」は、山岸の青年期における回心体験を深化させ、思想と呼びうる水準にまで高める媒体として機能した。これが、「鶏」の媒体としての第二の働きである。

宗教的・精神的な体験は、そのままでは思想たりえない。一度の回心によって、宗教者が誕生するわけではない。彼の真価が発揮されるのは、回心体験以降、その体験の意味が問われ、ある程度の体系性を備えた思想へと練り上げられていく日々においてである。体験には、一定の発酵期間が必要である。そして、体験という「パン生地」をふくらませるには、「パン種」がなければならない。山岸の場合に、「パン種」の役割を果たしたのがまさに「鶏」だったのである。

山岸巳代蔵は、明治34(1901)年8月12日、滋賀県蒲生郡老蘇村大字東老蘇にて4人兄弟の3男として生まれた。15歳で京都の間屋に奉公に出るが、すぐに離職して各地を転々とする。山岸自身の言うところによれば、子供の頃から一風変わった性格の持ち主で、絶対妥協がなく、親からも「この子のいうことはわからん」と言われていたという。また、そういった性格から、友達にもめぐまれなかった。⁽⁶⁾放浪の原因も、妥協しないという彼の性格と関わっていた。

ところで、この放浪の期間は山岸にとって重要な時代で、彼は一種の回心体験をする。この体験は、彼が人生の重要な岐路に立たされた時に、たえず立ち戻ってふれざるをえない種類のものであった。養鶏法についてまとめた山岸の最初の著作『山岸式養鶏法 — 農業養鶏編前編 — 』(1954)の「本養鶏法の沿革」では、次のように述べている。

「私は19歳の時、或る壁にぶつかり、苦悩の内に一生かけての仕事をはじめたのです。そして人生の理想について探究し、真理は一つであり、“理想は方法に依って実現し得る”と云う信念を固め、只今ではその方法を「月界への通路」と題しまして記述し続けております。

この仕事をなす為に別に職業を必要とした訳で、ふとした事から養鶏を職業としたので⁽⁷⁾す。」

ここでは、人生の理想についての探究が、若い山岸にとっての重要な課題で、それを解く鍵を体験の中でえたことになっている。また、養鶏は理想の探究とは直接結びつかず、生活の糧と位置づけられている。しかし、のちになると、この体験はより具体性を帯びた形で表現される。第一回特別講習研鑽会での開講挨拶〔昭和31(1956)年1月12日〕で、山岸は彼の体験に再び言及している。

「私は少年時代からといいますか、まず、ハッキリ線が出たのは、青年時代からです。19、20、21歳のこの三年間は専心して、今にかけておる理想社会、本当の世界を究明したわけなんです」⁽⁸⁾

こちらでは、探究の対象は理想社会であったと明言されている。また、養鶏についても、「人間社会で出来ることを鶏に応用してみようかと、こういうことを感じ、ある機会があったわけなんです」と、その位置づけは、単なる生活の糧から、理想社会の実験台へと変化している。山岸会の運動が進展するにつれて、山岸自身の体験と養鶏についての意味づけが変化していったわけである。逆に言えば、山岸会の運動が成立しなかったとしたら、さらには、山岸が養鶏と出会わなかったとしたら、山岸の青年期の体験は彼の人生の上においてそれほど大きな意味を持たなかったのではないかと考えられる。そもそも、山岸会がなければ、彼に体験を語る機会は訪れなかったはずである。

山岸は、その体験の時期と相前後して、郷里で徴兵検査を受け不合格となって、東京へ出る。そこで、社会主義の運動と関わったらしく、刑事につけねらわれたりもした。その際に、彼は「鶏」と出会ったのである。

「私が養鶏に入った動機は、フトした奇縁ともいうべきものがあり、青年時代人生及び当時の社会組織に疑問を抱き、その探究に没頭し、昼夜の別なく参考書を読み漁り、身心を酷使し、かつ再三、拘引留置等の圧迫のために健康を害し、やせ細った秋の一日、郊外に出て読もうと一書を携えて葛飾方面に行った時、またイヤな尾行が付き出し、犬を撤くために或会社へ飛び込んだのが、小穴氏の日本家禽産業会社（東京）で、種鶏舎に飼われていた純白の白レグ（当時は銘鶏）の美しさと、広い建物の中に整然と並べられた、サイファー式孵卵器や電熱育雛器の中の可愛い雛に愛着を感じ、かつ私が把握した社会組織のあり方を、鶏に応用実験すべく郷里（滋賀）に帰って養鶏（初めは人工孵化）に着手したのです」⁽⁹⁾

『山岸式養鶏法』から、特別講習研鑽会での挨拶へと、体験と養鶏についての位置づけが変化していったことはすでに見たが、おそらく、山岸が初めて「鶏」と出会った時点では、それほど養鶏の意味については自覚していなかったであろう。白レグの美しさと、雛の可愛いさに素朴に感動したというのが、事実に近いのではないと思われる。そういった問題はあるにしても、この「鶏」との出会いは、山岸の人生を大きく転換させるきっかけとなった。これによって、山岸の養鶏家としての歩みが開始されたからである。

山岸は、郷里滋賀に帰って養鶏に着手したが、まったくの素人にとって養鶏も容易でなかった。最初は、人工孵化によって雛の販売を目指したが、商売向きでない彼の性格から代金の取り立てさえ満足にできず、雛の販売を中止して、育雛を試みる。しかし、育雛も

そう簡単にはいかず、育雛器の失火や病気などで数多くの雛を死なせ、一時は養鶏を捨てかけたこともあったと言う。昭和6（1931）年春、彼は京都へ進出したが、技術も不安定で景気に大きく左右され、経営にいきづまる。しかし、かえってこのいきづまりは、彼に窮状を打破する意欲をかきたてた。彼は、経営規模を大幅に縮小し、雇人もやめさせ、一人で一切の手作業をまかなうようにした。そして、彼の言い方では、「約2ヶ年養鶏に心身共に打ち込んで働⁽¹⁰⁾いたのであった。

山岸は、性格的に、世の中の常識や観念にとらわれないところがあり、それが妥協のない態度や放浪へとつながったが、一旦何かに強い関心を持てば、他のことは一切かきりみずに、それだけに専念した。そういった性格だったからこそ、約2ヶ年の間養鶏に専念し、のちの山岸式養鶏法を作り上げていけたのである。ところが、逆に、一応ものごとを究め、成果が上がるようになれば、関心は急速に失なわれていった。山岸にとっては、探究の結果ではなく、探究の過程が重要だったのである。したがって、戦後自活用の農業を始めた際に、養鶏を農業経営の中に組み入れるという新たな課題が彼の意欲を再びかきたてることとなった。さらには、山岸会の運動の開始〔昭和28（1953）年3月〕という新たな状況が山岸の関心をより一層高めていったのであった。

山岸会の運動を背景として、山岸の青年期の体験は30年にわたる養鶏の実践と結びついた。両者が結びついた時点で成立した山岸の自己理解は、次のようであった。彼は青年期の回心体験の中で、人生の理想あるいは理想社会のあり方についての確信をえた。その確信を検証するために、鶏を実験台として、鶏の世界に、彼の考える理想社会のあり方を応用してみた。養鶏を通じて、人間の理想社会について深く考えてきたというのである。この山岸の自己理解は、決して根拠のないものではなかった。彼のユートピア論を検討するならば、そこに養鶏家としての発想や体験の影響が見てとれるからである。その意味で、「鶏」は山岸にとって、体験を思想へとふくらませる、まさに「パン種」だったのである。

III ユートピアを表現する媒体としての「鶏」

「鶏」を通して、人間のユートピアについて考えを進めてきた山岸巳代蔵において、彼の思想は、その山岸式養鶏法の中に集約されていた。少なくとも、山岸会の運動が開始された当初の段階では、彼は養鶏を通してしか自らの考えを語りえなかった。その意味で、「鶏」は山岸のユートピア論を表現する媒体であり、それが「鶏」の媒体としての第三の働きということになる。

確かに、山岸会の運動の初期の段階において、一般の会員の関心は養鶏の技術面にもつ

ばら集中し、山岸が養鶏を離れて彼の考えを述べたとしても、それが受けいられる素地は整っていなかった。山岸の側にしても、ユートピア論を説得的に展開するだけの力量もまだ備わっていなかった。養鶏を仲立ちとして、会員たちを一步ずつ自分の方に引き寄せる努力が山岸に要求された時代であった。まず彼としては、山岸式養鶏法が単に金もうけの手段であるだけでなく、鶏にとっての理想的な環境づくりを目指したものである点を強調せねばならなかった。

「私達の鶏は魚気なしの麦糠主体で粒餌も皆無で満足して個々に持っている能力一杯に稼ごうとします。私達は体を損ねて迄も稼がないように「鶏を走らすな」と注意して決して鞭を当てないのです。走り過ぎ（産み勞かれ）倒れる鶏や、何万羽の中に一羽も他の鶏の羽を食う追剥も食い過ぎも脱腔症も出来ませんから医者も薬も警察官も無用です。鶏の国も様々です。」⁽¹²⁾

この文章は、『山岸式養鶏会会報』創刊号〔昭和29（1954）年4月1日発行〕に発表された「獣性より真の人間性へ（一）」の一節であるが、山岸式養鶏法による鶏の社会が擬人化されて表現されている。しかし、ここで注目されるのは、鶏の社会では追剥も存在せず、医者も薬も警察官も無用だとしている点である。山岸の考え方によれば、理想的な環境が用意されるならば、そこには物を奪いあう者も、また病いも存在せず、したがって、医者も警察官も無用になるというのである。これは、単に鶏についてのみ言えることではなく、人間の場合にもあてはまることであった。山岸にしてみれば、彼の鶏についての発言は、同時に人間社会のあり方についての提言を含むものだったのである。彼は、鶏の社会に仮託して人間のユートピアを語ろうとしたのだと見ることができる。それは、次の文章により明確にあらわれている。

「私は青年時代から人生を究め、一貫した科学及び心理学的に社会構成について専攻している関係上、養鶏法にも、そうした部分がすこぶる多いことで、この飼養法によりまずと粗食をも、美味しく食べてより太りよく産み、弱いものを強いものが圧倒しないし、強制されない、縛られない快適な環境に物静かで心理的にも豊かさにみちた、競いあいのない愛善社会が、鶏の日常に実現していることが見えるのです。一回でもこの方法で育雛されたならば、そのヒナを通じて人生観、人間社会のあり方についてわかって頂けるものがあり、精神面での喜びの大きさは経済的収穫の比ではありません」⁽¹³⁾

山岸式養鶏法によって実現された鶏の社会は、鶏にとってのユートピアであり、その原理は人間社会のユートピアにも共通する性格を持っていた。したがって、山岸式養鶏法に取り組む中で、鶏のあり方に注意をはらっているならば、その中から人間のユートピアの原理についても理解できるというわけなのである。つまり、鶏舎の中の鶏の社会はユート

ピアのモデルであり、ユートピアの原理を教える教育の場だと山岸は考えていたのである。

では、鶏の社会にも、人間の社会にも共通するユートピアの原理とは何であろうか。山岸は、30年にわたる養鶏家としての実践の中からその原理を見い出してきた。例えば、山岸式養鶏法では、鶏に対して餌を食べただけ無制限に与えることになっていたが、山岸はそのことについて次のように述べている。

「鶏に多い食滞症をおそれ、餌量を制限する事も間違いで、(中略)成鶏でも、雛も、いつでも食べられるとあれば消化能力のある量より食べないものであり、米山の上で飼っても、⁽¹⁴⁾一羽の食滞症の出ない事を保証します」

餌をあり余る程豊富に与えれば、鶏は餌の欠乏をおそれることなく、適量以上には自ずと食べなくなるというのである。この考え方は、人間社会にも応用され、物があり余る程豊満に存在すれば、そこには自ずと、物の奪いあいのない社会が実現されると説かれる。山岸のユートピア論の特徴は、まず物質面での充実を第一に考えるところにあるが、そこにはまさに養鶏家としての永年にわたる経験が強く影響していた。

さらに、養鶏家としての発想が最も顕著にあらわれているのが体質改造の考え方である。山岸は、昭和29年の終わりに発表された「知的革命 私案(一)」⁽¹⁵⁾の中で、人間が動植物の改良に取り組み新しい優秀な品種を数多く作り出してきたにもかかわらず、人間自身については、一向そういった方面での試みをしてきていないことを指摘し、計画的・積極的に人種改良を試みる事が理想社会の早期実現につながると説いている。

この一見すると、大胆で、危険思想ともみなされる人間の体質改造の考え方も、また、その元をたどれば、養鶏家の発想というところに行き着く。山岸は、強壮な鶏を育てる際の消化器と染色体の重要性に着目した。生まれたばかりの雛に、水に浸けない堅いままの屑米を無制限に与えるのも、消化器強化のためであったが、染色体の面について、山岸は鶏種の交配に力を注いだ。彼は、白色レグホーンなどの純粋種は、高い産卵性を持ちながら、かえってそれが各部に異常を起こし易くするとし、環境適応性や抵抗性の高い交配種⁽¹⁶⁾を高く評価した。そして、彼は実際に交配に取り組み、実用的な食卵鶏を作り出した。

鶏種の改良における経験が、人間の人種改良という発想を生み出したのである。それほどまでに、山岸の考えには、養鶏家としての発想が深くしみこんでいた。したがって、人間の体質改造について述べる際にも、次のように、あたかも鶏種の改良について語るかのような筆致を見せる。

「遺伝因子には、その殆どが劣悪形質遺伝因子であっても、一個又は数個の優秀なものを含んでいることもあり、それを抽出して、他のそれに劣った因子に置き替える組み合わせ法によって、悪質を除去して固定したり、場合によると、劣性優良形質二個を組み合わせ

せて、一代特別子を造ることも可能です」⁽¹⁷⁾

山岸のユートピア論の全体的評価を行なうためには、彼のあみ出した山岸式養鶏法に対する理解が必要である。山岸のユートピア論には、養鶏家としての発想が深く浸透し、彼はあたかも養鶏を行なうかのごとくに、人間の理想社会を建設しようとしたのである。その影響は、山岸会がユートピア運動としての性格を強く打ち出す以前の時代にとどまらず、現在にまで及んでいる。「鶏」は、山岸の個人的な体験を思想へとふくらませる働きを示しただけではなく、ユートピアのイメージを伝えるユートピアのモデルとしての役割を果たしたのである。

IV ユートピアを実現する媒体としての「鶏」

「鶏」が単に、人間の理想社会のあり方を間接的・比喩的に表現するユートピアのモデルにとどまっていたなら、山岸会の運動が昭和20年代後半から昭和30年代初めにかけて、あれほど急速に拡大することはなかったであろう。山岸式養鶏法を農業経営の一環に組み入れること自体が、そのままユートピア実現へ結びつくとされていたのである。「鶏」の媒体としての第四の働きは、それがユートピアを実現する手段として構想されていたところに求められる。つまり、山岸式養鶏法はユートピアのモデルであると同時に、ユートピア実現の手段であるという二面性を備えていたのである。

食糧増産の強く叫ばれる時代、各農家にとって、旧来の農業経営の状態からいかに脱皮していくかが大きな課題であった。そういった状況の中で、養鶏に対する関心が大いに高まったことについてはすでにふれた。まず、物質生活の安定と充実が第一であった。山岸の主張も、そういった現実的な要請に答える形でなされた。山岸式養鶏法を取り入れることによって、鶏糞を利用しての稲の増産と、卵や老廃鶏の売却による現金収入の増加が期待された。手間のかからない養鶏の導入によって、物質面での生活が安定・充実すれば、労働時間が短縮され、余剰時間が生まれることになる。そうなれば、長時間にわたる苛酷な労働をしいられていた農民の生活にも余裕ができ、そこから精神的に豊かな生活への展望も開かれるはずである。山岸式養鶏法が十分に活用されるなら、事態はそのように進むはずだと山岸は考えた。

これは、個々の農家の生活にだけ関わる事柄ではなかった。山岸式養鶏法が広く世の中に普及していけば、農業界全体の生産性は向上し、食糧の欠乏という事態は改善されていく。とにかく、国民全体の食生活をまかなえるだけの食糧を確保することが先決であった。食糧の生産・供給が安定することが、精神生活の充実の前提条件でもあった。理想社会の

実現を説くには、まず、物質生活の安定を可能にする具体策を提示しなければならなかったのである。

山岸が、物質生活の安定から精神生活の充実へという方向性を示したのは、時代の要請に答えるということの他に、彼が養鶏家であったことも少なからず影響していた。養鶏の実際に携わるためには、常に現実の状況から出発しなければならなかった。鶏を飼う人間は、刻々変化する状況に適切に対処していかなければならなかった。山岸が、物質生活の安定という時代の声に忠実であったのも、そうした養鶏家としての経験が大ききもの言っていたように思われる。そうした山岸の理想社会実現の方向性を最も端的に表現しているのが、「山岸会趣旨」のうちの「(2)方向」の箇所である。

「1 物理・化学・科学／心理・哲学・教育・宗教史・文学／技術・芸術／産業・交流・その他及び社会・政治総てに携わる学者、實際家に、各々の持ち場に専念し得るような環境を造り

2 学問と実験を基として、凡ゆる物質を空気・水の如くに容易に使用し得るよう、豊富に生産し

3 物資の豊満により、物の争奪の世界を無くし

4 学問と実験を基として体質を改造し、疾病を排除し、外観実質共に優秀なる子孫が生れ

5 自己の延長である同属子孫の幸福と繁栄を招来せん、との目標を同じくする全世界の人類間に、提携と同属愛の優美な心境を造り

6 物心両面共に他を侵す必要なき、協力社会を指向する。」

山岸は、理想社会を実現するためには、以上のような段階を踏んでいく必要があると認識していた。まったくの素人として養鶏を始め、大いに苦労したことが、学問の奨励を第一とすることに結びついた。また、生活環境が十分に整えられれば、問題は解決するという山岸の考え方を、この中に見い出すこともできる。人が争い、物を奪いあうのは、すべての人々を満足させるだけの量的に十分な物資が確保されていないからだというのが、山岸のもの見方であった。

もちろん、こういった山岸のユートピア実現の方法論は、それ自体を取り出して論ずるなら、あまりに素朴で単純すぎる理論であった。しかし、山岸式養鶏法に実際に接し、その一種マジカルな魅力にとらわれた者には、山岸の主張は決して夢物語とは映らなかったのである。しかも、周囲には同じような体験を経た多数の会員たちが存在し、彼らは手弁当で山岸式養鶏法普及のために各地を奔走していた。会員たちはお互いを刺激しあい、そこには活発な支部の活動が生み出されていった。そういった状態の中で、山岸式養鶏法の普及によって社会を変革しようという共同の幻想が形作られていったのである。彼らにと

って、山岸式養鶏法は理想社会実現の手段に他ならなかった。

「鶏」の媒体としての働きのⅠからⅣに関して、Ⅰ・ⅡとⅢ・Ⅳではその性格に幾分かの違いがある。Ⅰ・Ⅱは、山岸巳代蔵の生涯と山岸会の歩みの上で、「鶏」が人と人をつなぎ、体験を思想へと練り上げていく媒体として機能したという実際的なレベルに関わっているが、Ⅲ・Ⅳはむしろ山岸個人の頭の中の構想のレベルに関わっているからである。つまり、山岸の考え通りにことが進めば、「鶏」はユートピアのモデルともなるし、同時に、ユートピア実現の手段ともなるというわけである。

もちろん、現実には山岸の構想そのままにはいかなかった。「鶏」がユートピアのモデルとなり、その実現の手段たりうるためには、養鶏を導入しての農業経営が円滑に進み、そこから十分な成果が得られる必要があった。つまり、養鶏での成功が山岸の構想の前提条件となっていたのである。山岸式養鶏法が、山岸の説くような画期的な方法であると認識されない限り、山岸の人間や社会のあり方についての発言は周囲に受け入れられるはずはなかった。しかし、現実には誰もが山岸式養鶏法に成功したわけではなかった。山岸式養鶏法を取り入れて、大いに成果を挙げる者が出る反面、失敗し失望する会員も少なくなかった。

その原因は様々に考えられるが、最も大きな原因は、養鶏に関する山岸と他の会員たちとのキャリアの差であった。山岸は20歳の頃から約30年にわたって養鶏の事業に携わり、それなりの成果も挙げ、自らの方法に対する自信も深めていた。それに対して、一般の会員たちの場合、養鶏に関する経験は様でなかった。特に、山岸会の初期の段階では、一般農家向けの農業養鶏の普及のみが押し進められたことを考えれば、その当時山岸会に集まってきたのは養鶏を専業とする専業養鶏家ではなく、むしろ養鶏に全く経験のない農民が大多数であったと推測される。養鶏は手間をくい、うかつに手を出すべきものではないと教え込まれてきた者にとって、その常識を打ち破る山岸式養鶏法は大いに魅力ある存在だったのである。

しかしながら、30年の経験を積んだ専門家とずぶの素人との間では、認識の上で大きな差があった。養鶏の経験のない者に、山岸式養鶏法の全体像を把握するのは容易でなかった。一日一回給餌という指示に従うことはできたとしても、その方法の論理的な妥当性や、旧来の方法に比較しての優秀性の根拠を認識することは素人には不可能であった。まして、これは彼らの責任ではないが、彼らに山岸式養鶏法にこめられた山岸の考え方、思想、あるいは精神をくみ出せようはずはなかった。彼らには、青年期の回心体験もなければ、体験を思想へと練り上げていった長期にわたる苦難の日々は存在しないからである。

彼らにとって、山岸式養鶏法はすでに与えられた技術の体系であり、その習得は知識としてのそれにとどまらざるをえなかった。山岸式養鶏法の体得には、それ相当の経験を必要としたのである。

山岸自身も、その経験の絶対的な差を十分に意識していた。『山岸式養鶏法』の「序」では、その点に関して、「この一書を読んで下さったのみで、成功される方は、世にも稀な所謂、聖徳太子のような人か、何も知らない無批判的に実行する素人の方でしょう」と述べている。つまり、山岸の永年にわたる努力の結果である山岸式養鶏法の全体をまず理解して養鶏に取り組むのは不可能であり、そうである以上、山岸の指示に従うしかないというわけなのである。山岸は、自らのあみ出した山岸式養鶏法が、方法として完成された完璧なものであると考えていた。その自信に裏打ちされて、彼は養鶏法を「ギヤーステム」にたとえて表現する。

「深く根本理論を追求し、御自分の判断を織り込んで、実行される堅実型・堅人型（実はこの場合凡人）の方の成績は、理屈に無頓着で方法実践型の人の結果に劣るのです。ギヤーステムは、学問・技術の集積であり、正確さに於いて答えに狂いがなく、3：1歯車の主軸を誰が廻しても、猿が廻しても、小ギヤは常に1に対して3回転するのです。本養鶏法は左様なものです」⁽¹⁸⁾

そして、山岸は山岸式養鶏法を取り入れようとする者には、その方法を「全面的に盲従的に実施して」くれるよう望んだ。山岸がそういったことを繰り返し主張せざるをえなかったのは、現実には誰も彼の指示に、忠実に従ってはいけなかったからである。山岸式養鶏法の全体的な理解のないまま、それに従えというのでは、心理的に納得できなくても当然である。それでも彼は、再三再四会員たちに方法の忠実な実行を要求し、時には、「糞べだけ真似て、半可通のチョイかしこ頭で、間口広く寄せ集め式変形養鶏をデッチ上げてみたところで、曲りくねった、均整のとれない、一貫性のない、使いものにならないものである事は当然で、二流品はいくら並べても二流品に過ぎなく、むしろ下手な思案は止め、云われるままに易しい道を実行に移した方が効果的でしょう」⁽¹⁹⁾といった具合に、強い調子で会員たちをいましめている。

もちろん、山岸は自らの指示に対する服従だけを説いていたわけではなかった。『山岸式養鶏法』では、育雛40日目（増補改訂版では60日目）までの方法しか説明しないという、一種の歯止めを用意していた。会員たちは、養鶏を続けようとするれば、どこかで情報を得ておかなければならなくなったのである。そこで山岸は、「研鑽会」の重要性を強調し、養鶏を志す者同士が衆知を寄せ合い、経験者の意見等も取り入れて、養鶏を行なう上で派生してくる問題を解決していくよう望んだ。『山岸式養鶏法』の「結び」でも、「要

するにこの養鶏法は、研鑽会を以て完璧とします」と述べている。そして、研鑽会を定期的に開催できる支部の結成や、支部への加入を会員たちに呼びかけた。

ただ、山岸としては、山岸式養鶏法の技術に熟達してくれることよりも、その方法の底に流れる彼の精神を理解してくれることの方をむしろ望んでいた。それは、養鶏法を自らの利益のためだけに利用し、悪用することを恐れたからでもあった。山岸会の会旨として、「われ、ひとと共に繁栄せん」をかかげ、「私達は、諸事を考え行なうに当り、その正確さを期するために、その判定に、この会旨をもってします。その思い為すことが、果して終局に於て、自己を含めた社会の永遠の幸福・繁栄に、資するものであるか、どうかを検討し、一次的（自己一代、及び自己の周囲のみの）目前の結果にとらわれないように、心して居ります」と述べているのも、自己の利益のためだけに山岸式養鶏法を利用するのは、それを本当に生かしたことにはならず、それでは理想社会の実現に結びつかないと彼が考えていたからである。

しかし、会員たちにとっては経済的利益が優先し、彼らの関心はもっぱら養鶏の技術面にしぼられた。したがって、山岸は絶えず、養鶏は単なる手段であり、目的は別のところにあると繰り返し主張することとなった。例えば次のようにである。

「山岸式養鶏会は、養鶏を通じて山岸会の趣旨としている快適な社会を造り、人皆幸福な世界に真に人生を楽しむためにする養鶏を、行なう人のための会であります。

養鶏が目的でなく、幸福が目的であり、養鶏は手段であることを、認識しなければ読むもの、見るもの、聞く事が不可解となり、考えること、行なう事皆根本的に間違っています」⁽²⁰⁾

両者の間には、乗り越えがたい壁が確かに存在していた。「鶏」は人間関係を取り結ぶ媒体として山岸会の形成に寄与したが、その一方で、「鶏」という媒体を通してしか表現されない山岸の精神は、直接の理解を妨げられる結果となった。そこに、「鶏」が媒体として選択されたことの限界性を見ることができる。そして、さらに言えば、それは媒体そのものが持つ矛盾であった。

この時点で、山岸会の運動は「鶏」という媒体に今後どう対処していくかという課題に直面したのである。そこで、彼らはユートピア運動の色彩をより強く打ち出す方向へと進んでいったわけであるが、それは同時に脱「鶏」の方向性を示す選択であった。

まず、山岸のユートピア論『ヤマギズム社会の実態』が発表された。この論文は、「解説 ヤマギズム社会の実態（一）」「私的革命私案（一）」「知的革命の端緒 一卵革命を提唱す」の三部から構成され、全体で400字詰原稿用紙にして160枚に及ぶものであった。これは、育雛40日目以降の方法について述べた『山岸式養鶏法』の後編の出

版を望む会員たちの声に答える形で、山岸の考えを明らかにしたものであるが、ここにおいて山岸は初めて、「鶏」を比喻として用いずに彼のユートピア論を展開した。ここで、『ヤマギシズム社会の実態』の内容について詳しくふれる余裕はないが、そこにはユートピアについての山岸のイメージがつづられている。その項目の標題を追えば、ユートピアたる「ヤマギシズム社会」は、真実の、かつてない新しい、法で縛らぬ、悪平等を押し付けぬ、差別待遇のない、貧困者のない、物は飽くほど豊満な、幸福一色の快適社会であるとされた。そして、その実現のために、あらゆる問題を解決する機会として「研鑽会」の重要性が強調され、さらには、ヤマギシズム社会実現のために「命までも打ちこんで」奔走する「十人のメンバー」の出現が期待された。また、「ヤマギシズム」ということばがユートピアを指示する表現として用いられるようになったのも、この論文の発表以降のことである。この論文は最初、会員たちの前で山岸自身が口頭で発表した⁽²¹⁾が、会員のひとり⁽²¹⁾は発表を聞いて感極まり、「先生、今までこんなに親切に、分り易く言って下さった事があるのですか」と発言したと伝えられる。しかし、この気持ちは山岸自身についてもあてはまることではなかったかと思われる。彼は「鶏」という媒体を用いずに、自らの考えを初めて語りえたからである。

『ヤマギシズム社会の実態』の発表は、山岸会がユートピア運動としての色彩を強めるきっかけとなり、脱「鶏」の方向への最初の一步となったが、昭和31(1956)年の1月から開始された「特別講習研鑽会」⁽²²⁾はこの方向性をさらに押し進めることとなった。「特別講習研鑽会」は普通、「特講」と略称されるが、これは、与えられたテーマを考えぬく中から、山岸の考え方・思想、つまりは「ヤマギシズム」を体験的に理解していくイニシエーションの機会であった。「特講」の参加者たちは、一週間のプログラムの中で、山岸が青年の時期から考え続けてきた様々な問題に取り組み、その問題に対する解決の方法を見い出していく過程を再体験していくのである。また、「特講」が集団的告白の場として、一種の「集団的沸騰」の状態を呈したため、参加者たちに理想社会実現の運動への熱意をかきたてることともなった。

ともかく、山岸会はこうして、『ヤマギシズム社会の実態』の発表により会の理念を、「特講」によってイニシエーションの機会を得ることとなったが、それは同時に、山岸会の内と外とを隔てる敷居をより鮮明にすることでもあった。「特講」というイニシエーションの中で「ヤマギシズム」という理念を体得したかどうかが決定的な意味を持つようになったからである。イニシエーションを経た人間には、世界はそれまでとは違ったものとして見えてくる。彼らには、「特講」という共同の体験こそが、山岸会の内と外とを隔てる敷居だったのである。やがてこの敷居は、山岸会をコミュニケーションへと導いていくきっかけ

ともなった。

だからといって、山岸会が脱「鶏」の方向へ完全に進んだわけではなかった。コミュニケーション建設のきっかけを与えたのは、卵粉工場設立のさそいかけであったし、それから山岸会の生業の中心は「鶏」であった。現在でも、山岸会と言えば「鶏」という印象が強い。そして、「鶏」の媒体としての役割にも変化が起こり、「鶏」を飼うことが修行としてとらえられたこともあった。「鶏」は時代の変化に即応して、媒体としての新たな機能を付け加えて来ているのである。

山岸にしても、山岸式養鶏法に引かれて山岸会に結集した会員たちにしても、彼らは「鶏」を跳躍台にして彼らの現実を超越しようとしたのである。「鶏」を媒介にして、ユートピアという超越的な世界を垣間見ることができたのである。ただし、「鶏」が常に跳躍台となりえたわけではなかった。だからこそ、「鶏」以外の跳躍台を求めての模索が始められたのである。

以上の問題は、山岸会という集団だけに特有なものではないだろう。集団には、その形成の核となる媒体が存在し、その媒体の示す特殊性が集団の展開過程を規定していく。そして、彼らはある時点から、媒体を排しての直接的な人間の交わりや、真理の把握を希求することとなる。だがそこには、媒体にかわって、集団固有のことばの体系が生まれることとなる。そのことばによって世界を語ることが、真実の生き方であり、集団の理想実現への道ととらえられる。その時、彼らは自分たちが今度はそのことばにとらわれていることを忘却する。山岸会について、それを問題にするには稿を改めねばならない。

註

- (1) 山岸会は、昭和28年に結成された理想社会の実現を目指す団体である。しかし、結成当初は会の指導的人物であった山岸巳代蔵の考案した山岸式養鶏法の普及を通して、社会を改善していくことを第一の目標としていた。この会の性格は運動の展開とともに大きく変化していく。その最初の転換点が、山岸巳代蔵のユートピア論、『ヤマキシズム社会の実態』の発表であった。昭和29年の暮のことである。ここから山岸会はユートピア運動としての色彩を強くした。さらに、昭和31年から開始された(ヤマキシズム)特別講習研鑽会は、山岸会へのイニシエーションの機会として機能することとなる。特別講習研鑽会の開始は会の活動にはずみをつけ、ユートピアのモデルとしてのコミュニケーションという発想が生まれる。今日、山岸会はコミュニケーションとして名高いが、その基礎はこの時期に形成された。しかし、コミュニケーションの誕生は会にとって無理を強いることとなった。その苦境を脱するためさらに無理を重ね、いわゆる「山岸会事件」をひきおこして会の運動は大きく後退する。その後分裂などもあって活動は停滞したが、昭和40年代後半から再び社会的に注目されるようになる。この時代山岸会に関心を持ったのは、初期の農民達に代わって、都市部に住む若者達であった。彼等は山岸会を自己実現の場として考えた。この時期、山岸会は急激に膨張したが、それがあま

- りに急すぎたために、様々な矛盾が発生し組織の改革を迫られることとなる。昭和50年代はこの内部改革の時代であった。一方、山岸会の生産する卵や鶏肉などの食品類は折からの自然食ブームにのって、一般の消費者に受け入れられ、山岸会のコミュニケーションにおける生産量は大幅に増加し、その結果コミュニケーションの生活は安定した。その規模は現在、全国にコミュニケーションが30数箇所、メンバー約1000名、日本最大のコミュニケーションである。
- (2) 水津彦雄『日本のユートピア』太平出版社 1971, 山岸会文化科編『Z革命集団・山岸会 — その理論と行動 —』ルック社 1971 参照。
 - (3) 佐川清和編「前渉行程論(1)」『ボロと水(ヤマギシズム運動誌)』第4号(1972) 参照。
 - (4) 山岸巳(山岸巳代蔵のペンネーム)「知的革命の端緒 一卵革命を提唱す」『山岸会・山岸式養鶏会会報』第3号(1954)参照。
 - (5) 同参照。
 - (6) 山岸巳「革命へのあげぼの」『けんさん』第111号(1973)参照。
 - (7) 引用は、その改訂版である『山岸会養鶏法 — 増補改訂・農業養鶏編 —』(以下『山岸会養鶏』)山岸会出版部 1955, による。同P. 38
 - (8) 山岸巳「革命へのあげぼの」P. 3
 - (9) 初出は『農工産業新聞』。引用は、山岸巳代蔵「山岸養鶏の真髓・見ずして行う勿れ 行わずして言う勿れ」『ボロと水 第5号(1973), P. 112。
 - (10) 『山岸会養鶏法』P. 39。
 - (11) 3月16日に、山岸式養鶏法の普及を目的とした「山岸式養鶏普及会」(同年10月に「山岸式養鶏会」と改称)が、同月28日には快適社会の実現を目指す「山岸会」が結成された。
 - (12) 『山岸式養鶏会会報』創刊号, P. 5。
 - (13) 山岸巳「稲と鶏」, 初出は愛善みづほ会の機関誌と考えられる。同会は大本教系の農業団体。
 - (14) 『山岸会養鶏法』P. 86。
 - (15) 『山岸会・山岸式養鶏会会報』第3号。
 - (16) 水津彦雄『日本のユートピア』参照。
 - (17) 『ヤマギシズム社会の実態』山岸会本部 1954, P. P. 67-68。
 - (18) 『山岸会養鶏法』序。
 - (19) 同上。
 - (20) 山岸巳「会の性格と運営について」『山岸式養鶏会会報』第2号, P. 17。
 - (21) 「長岡幸福研鑽会 — 歴史的意義を持つ —」『山岸会・山岸式養鶏会会報』第3号, P. 50。
 - (22) 特別講習研鑽会については、拙稿「イニシエーションと体験」『宗教研究』第257号(1983)参照。